

# 夕さん 五話

物部俊之

## 「夕さん」

---

### 「夕さん 五話」

古びた二階建て木造アパート 愛育園、その表に小さなハーブ園がある。田の字にきっちり、煉瓦で分けられた小さな花壇がいくつも整列し、アパートの緩さとは対照的だ。

秋の終わりの朝日を浴びて、夕と幸が向かい合って立つ。夕が十小節程の短い歌をうたい、それを真似て幸も歌う。朗らかな曲調だけれど、異国の言葉のようでもあり、この国の古い言葉のようでもあり、意味はわからないが妙に引きつけられる歌だ。

「これで幸も言祝ぎ歌の春夏秋冬の四つの歌と二四節季の二十四の歌を覚えた。しっかり練習なさい。きっちり、身についたら、次は七二候の歌を教えます」

幸が目輝かせて頷いた。

「おおい。おはよう、夕ちゃん、幸ちゃん」

アパート一階端に住む管理人の岡田だ。一輪車に堆肥を載せてやってきた。

「母さん、おはよう」

夕が笑顔で岡田に挨拶をした、幸はまだ人に慣れていないのか、こくこくと岡田に頭を下げる。

「夕子ちゃんは早出かい」

「眠い目をこすって出かけました。母さんは畑仕事ですね」

「そうだよ。すっかり荒れてるけどさ」

岡田は一輪車を止め、花壇の端に腰掛けた。夕と幸が岡田の隣に座った。

「腰が痛くて外に出られなかったけど、夕ちゃんのおかげで歩けるようになったし、もう一度、花壇をにぎやかにしようと思ってさ」

「そうですね、この古い木造アパートもいい雰囲気になりますよ」

木造二階のアパート、中央に入り口があり、二足制だ、居住者は片側の靴箱に靴を入れ、代わりにスリッパを履く。杉の板張りの壁、年輪があちらこちらに浮かび上がるのは枝を切り落とした跡だろう、窓のサッシが木製である所為もあって、なにやら、全面に昔懐かしさを演出している。

「いまは秋も終わりで花の時期も過ぎてしまったけど、春にはたくさんのお花を咲かせてさ、その辺りにテーブルとベンチを置いて、みんなで英国風のお洒落なお茶をするのさ」

このぼろアパートを前にして、英国風のお洒落なは厳しいが、それを励みにするというなら、いらぬことは言わない方がいいと夕は思う。

「英国風のお茶の時間、いいですね。そういえば、母さんって目の色、ちょっと青い色しています」

「まあね、あたしは親を知らないけど、どっちかがそうだったんだろうね」

「随分、大変なことを母さんはこともなげに言いますね」

夕が動じることなく頷く。

「あたしは教会の前に捨てられていたんだ。神父様が親代わりになって育ててくれたんだよ」  
夕は以前、岡田が戦後しばらくして生まれたのだと言っていたのを思い出す。なら、多くの国で問題になる外国兵士とその国の女性との子供だろう、兵士は兵役が終わり、女性の前から、忽然と姿を消してしまうのだ、結局、女性は赤ん坊を育てることが出来なくなる、岡田もそんな赤ん坊だったのかなと思う。

「教会で育ったというなら、母さんは生粋のキリスト教徒、どうして、教会を追い出されたんですか」

「え、破門されたって、知っていたのかい」

夕が横に首を振る。

「宗教に熱心な人たちは、金儲けでやっている人以外、物わかりがよくて優しい、それは現世に生きていないというか、生きている価値を社会に見いだしていない。自分の人生を他人事に見ている、私はそう捉えていますけれど、母さんはいまを懸命に生きようともがいている、そんなふうに見えますから、相容れなくて教会から追い出されたんだらうなって思いました」  
にかつと夕が笑みを浮かべた。

「夕ちゃんは宗教への偏見が厳しい、そりゃまあそういうこともあるだろうけどさ」

岡田は大袈裟に溜息をついて笑った。

「神父様が親になってくれて、学校は教会から通っていたんだ。真面目で心清らかな女の子だったんだ。でもね、戦争があったんだ、ベトナム戦争。十代半ばだったかなあ」

岡田が地面に立てた鍬の柄に顎を載せる。夕が興味深そうに岡田の顔をのぞき込んだ。

「ベトナムが北と南に分かれて戦った戦争ですね」

「アメリカの爆撃機がこの国から飛び立ってベトナムを焼夷弾で火の海にした。あの頃はね、この国の戦争が終わって、まだ、年数が経っていない、町が焼かれ、火の海を逃げまどった人たちがたくさんいた、だからさ、こんなことはしちゃだめだって、反戦運動が盛んになった。教会でも反対集会があったし、あたしも戦争に反対しましょうってちらしを配ったものだよ」

「随分と賑やかだったそうですね」

岡田が背を伸ばして言う。

「そうさ、凄かったんだよ」

誇らしげに岡田は顔を上げ頷いた。

「一所懸命だった。いてもたってもいれない気分だったんだ。でもさ」

ふっと、岡田は顔を曇らせ俯いた。

「教会が反戦運動を禁止したんだ。アメリカの本部からの指示があったらしい。あたしは反発して、教会を追い出されて、でも、神父様が親代わりだったから、教会が運営するこのアパートに管理人ということでお目こぼしをいただいたってわけだ」

岡田の言葉尻が少し自虐的になる。

「夕ちゃんなら、とことん、闘っただらうね」

ふっと、岡田が呟いた。

夕はにっと笑うと岡田を見つめた。

「夕は母さんを尊敬しますよ、辛かったことをぎゅっと忘れずに覚え続けようという姿勢に」  
岡田が溜息をつく。

「夕ちゃんが天使様だったなら、ありがたいありがたいと涙流して感激するんだけどね」  
夕がくすぐったそうに笑った。

「実はさ、ここは年寄りばかりだし、若い人が住むのは無理じゃないかって、不動産屋に言ってたんだ」

気分を変えて、岡田が気楽に言った。岡田は細かなことにはこだわらない。

「それは不動産屋さんから聞いていました。ここいらで一番安い。ただ、ぼろいし、お手洗いも共通、風呂無し。なんと言っても死にかけのじじばばばかりだ」

夕もあけすけに岡田に答えた。夕と岡田は案外性格が似ているのかもしれない。岡田が気さくに笑う。夕の性分が気に入っているのだ。

「その不動産屋の親父が、若い人がいれば何かと便利だよ。蛍光灯が切れたときとかさって言われてね、確かに業者呼ぶより早いかって思ったんだ」

「夕子は日曜大工が好きで、棚も自分で作るから、ちょうどいいところへ来たのかもしれない」

「私ら、夕子ちゃんや夕ちゃんに世話になっている、感謝しているんだよ。なんかさ、死んだようなじじばばが、少しばかり、やる気も出て、生き返ったようなもんだ。みんな、朝は外へ出て、散歩するようになったし、あたしはこうやってさ、花壇の世話もできるようになったんだから」

岡田が大げさに夕を拝む。

「ありがたや、ありがたや。天使様じゃないけれど、ありがたや」

夕さんは褒められるのが苦手で仕方がない。恐縮して視線を逸らす。

「私もこうしてここにいることができている嬉しいです」

夕の返事に、隣りで、幸もこくこくと頷いた。

夕は花壇を眺めて言った。

「こんなふうに細かく田の字に仕切った花壇は中世の教会の花壇によく似ています」

岡田が夕の前で初めて十字を切った。

「教会が、戦後、浮浪者の人たちの宿として建てたものだ。花壇には薬効のあるハーブを植えていたんだよ」

「岡田さんのシスターらしい振る舞いを初めてみました」

「あたしはさ」

岡田が小さく吐息を漏らした。

「初めて、夕ちゃんを見たとき、天使様がおいでになったと感動したんだけどねえ」

「けどなんですか」

夕が笑った。

「歩けるようになったのは嬉しいけどさ、孫の年くらいの夕ちゃんに血反吐はいてでも歩け、な

んて怒鳴られるなんてさ、ああ、夕ちゃんは天使様じゃないって泣いた、泣いた」  
夕が笑った。

「母さんに歩いて欲しいと願ってこそその暴言、ごめんなさい」

岡田がにかにかと笑う。多分、いつか夕に言ってやろうと思っていたのだろう。

「夕ちゃんは半分透けて見えるし、手を伸ばせばすり抜けちまう。天使じゃなきゃいったい何なんだろうね」

「天使じゃないは決定ですか。天使かもしれませんよ」

夕が楽しそうに笑った。

「天使といえば、神様の御使いだ。夕ちゃんは、神様相手でも喧嘩を売ってしまいそうだよ」

「それが必要であれば」

にいと夕が口を歪めて笑う。

岡田は大げさに溜息をつく、胸の前で十字を切る。

「この愚かな小娘を、神よ、どうぞ、お許してください。そのためにも、この娘のお尻を思いっきり蹴り飛ばして、性根を叩き直してやってください」

「母さんに呪われてしまいました。これからは神様に後から蹴られないように用心しなきゃ」

夕が楽しそうに言う。岡田も笑った。

「人聞き悪いねえ、呪ってなんかないよ。これも、また、愛だよ。さっきの呪い歌よりずっと真っ当さ」

「幸に教えていた歌のことですか」

岡田が頷いた。

「あたしが若い頃、まだ、敬虔なシスターだった頃だ。神父様の知り合いとかいう男が喧嘩に巻き込まれた。その男がいきなりさっきの歌を歌い出した、そしたらさ、相手の男たちがすうっと青ざめてさ、しゃがみこんじまって倒れていったんだ。一週間くらいはここで養生していたと覚えている。あたしはあれは呪いの歌だったんだって気がついたのでさ」

「それは冬の歌ですよ」

こともなげに夕は言う、幸に笑みを浮かべた。

「幸。秋の歌を母さんに歌ってあげなさい」

幸は頷くと、岡田の前に立ち、背を伸ばして歌をうたう。古いこの国の言葉でもあるようで、異国の言葉のようでもあるような、不思議な歌だ。一瞬、岡田は身構えたが、自分自身の体の変化に気がついた。なんだか、お腹から力がみなぎってくる。肩や背中も軽くなって、思いっきり走ることも出来そうだ。

幸は歌い終わると、岡田にどうですかと呟く。

「幸ちゃん、ありがとう、なんだか、いい気分だ」

幸がほっとしたように微笑んだ。

「秋は豊穡、たわわに果実や麦米の実る秋。それを祝うのが、言祝ぎの歌、四季、秋の歌です。生き物を元気にする歌。母さんが以前に聞いたのは言祝ぎの歌でも、冬の歌、生命の活動を押さえ込む歌です。言祝ぎの歌は季節に準えた百の歌があって、それを使い分けることで、古の人た

ちは豊かな生活を送っていたんですよ。ただ、難しい歌だから、私以外に歌える人を知りませんけど」

「びっくりした。夕ちゃんはそんな凄い歌をいつ覚えたんだい」

夕が少し俯いて考え込む。そして、顔を上げた。

「気がついたときには当たり前のようになっていました」

岡田がやはりと頷いた。

「夕ちゃんは、夕子ちゃんが生まれたときに現れた。これは、夕ちゃん年齢詐欺事件だ」

「なんですか、事件って」

「つまりだよ、夕ちゃんは見たい十六、七だ。でも、夕子ちゃんが生まれたときからその姿のままってんなら、十七に夕子ちゃんの歳を加えなきゃだ。なら、夕ちゃんの中高年、あたしらの側の人間だってことさ」

「うら若き乙女に厳しいなあ」

「いやいや、ずっとその姿のままってなら、百歳ってこともあるかもしれないよ。覚えていないだけで」

夕は両腕を組むと空を見上げた。

「なら、突き抜けて四百歳とか五百歳って言われる方が現実感がなくなって却っていいかもしれない。関ヶ原の戦いでは流れ矢が飛んできて危うく刺さるところでしたよとか」

「ま、夕ちゃんの肝の座り方はなかなかのものってことさ」

「ま。それなりに自信はありますよ」

ふと、夕が俯いた。秋の空は色が鮮やかすぎる

「母さん。夕は母さんにだけ、本当のことを申します。私は桃の木の精でございます。夕子の先祖である若者が今にも切り倒されそうになる私を守ってくれたのでございます。私はその若者に感謝し、未来永劫お前の子孫を守ってやろうと約束したのであります、いま思い出しました。ってのはどうですか」

岡田がうーんと首を傾げた。

「三十点、そこいら中に転がってそうな話だよ」

「母さんは厳しいなあ」

夕は気楽に笑う。

この話は夕子がたくさんの絵本を借りてきた、その一冊にあった話だ、幸の情操教育だと張り切っているのだ。

ふと幸が夕姉様と囁いた。幸の足下がおぼつかない、ふらついているのだ。

「母さん、幸をお願いします」

夕の声に岡田が幸に両手を差しだし、ぎゅっと幸を抱きしめた。お母様、ありがとうございますと幸が呟く。岡田の腕の中で幸が人形に戻っていった。岡田は幸を抱き上げると、そっと膝の上に載せた。

「初めて見たときは驚いたけれど」

岡田が言う。

「お母様、なんて言われると情が移るねえ」

岡田は溜息を漏らすと、夕に言った。

「幸ちゃんはずっと人の姿ではいられないのかい。なんだか、可哀想だよ」

夕は岡田の膝の上、幸を静かに見つめるとふっと柔らかく笑みを浮かべた。

「充電電池と同じです。幸は人の姿でいるための力を蓄える六日間、そして一日だけ人の姿になる。昨日も夕子は待ちどうしそうにそわそわしていて、幸が人の姿になったときは抱きしめて、まるで母親にでもなったようでしたよ」

「夕子ちゃんは情の深い優しい子だからねえ」

岡田が納得したように頷く。

「随分、昔、ニコラ・テスラという科学者が地球をまっふたつに割るという実験をしました。幸い失敗し、地球は丸いままですが、その原理は言祝ぎの歌と共通しています。共振させることによってエネルギーを操る。百ある内の七十二候の歌を覚えれば、歌でエネルギーを集めることができるようになって、幸は人の姿のままにすることができるようになります。言祝ぎの歌、春夏秋冬、四季の大の歌、次は季節を二十四に分けた、中の歌、二十四節季の歌、それから、季節を七十二に分けた、小の歌、七十二候の歌、合わせて百の歌がありますが、幸は中の歌、二十四節季の歌までは覚えましたから、もう一息ですよ」

「なんだか難しい話はよくわからないけれど、夕ちゃんも優しいんだねえ」

「世界の深淵に隠された大なる秘密の一つをを語ったのに、なんだか難しいの一言ですまされてしまいました」

夕はそっと笑みを浮かべた。

「母さん。私は夕子が生まれるまでの自分の記憶がまったくありません。多分、私にも幼い頃や、肉体のあった頃があったかもしれない。でも、何一つ思い出せない。私が怖いのは一瞬で現れた私は一瞬で消えてしまうかも知れないってことです。いまのこの言葉を言い終えない内に、私は跡形なく消えているかも知れない。何処かでまっさらな記憶で現れているかも知れない、今のことをすっかり忘れて、違う名前を疑問に思うことなく使って暮らしているかも知れない。それがとても怖いんです。特に夕子は奇妙なものに引き寄せられる、引き寄せてしまう。私がいれば、どんな奴からも守ってやるけれど、そのとき、私は夕子を忘れ別人として生きていたりするかもしれない、それを思うと辛いんです。辛いという気持ちを忘れているかもしれない自分に腹が立つんです」

夕子が柔らかな笑みを受けて幸を見つめた。

「ただ、幸が言祝ぎ歌を覚えれば夕子を守ってくれるだろうとは思っています、私の代わりに夕子を守ってくれるだろうって。もちろん、期待通りにならないかもしれない、でも、一つの道筋を用意はできます」

呆れたように岡田が溜息をついた。

「夕ちゃん自身の幸せはどうなんだい」

「私はいま、こうして母さんとお喋りできて幸せですよ」

岡田は言葉を返せず俯いた。

「それは違う船に乗っているってことだ」

岡田が俯いたまま呟いた。

「どうなんだい、夕子ちゃんだって年頃だ、夕子ちゃんが結婚したらどうすんだい」

岡田の言葉に夕は頬杖をついて考える。

「夕子は会社の先輩と付き合いだした、何日か前に話してくれました。さすがに小姑といたしましては、妹に迷惑がかからないようしなきゃならない。妻を守るという夫の仕事を奪うわけにはいきません。実家へ帰って両親の話し相手になるか、以前、介護施設で話し相手のボランティアをしていましたから、また、そういうことをするかな」

「夕ちゃんはそれで寂しくないのかい」

夕はふっと岡田の目を見つめると微笑む。

「それは、秘密」